

大学生と実践する着物文化の継承とSDGsへの取り組みについて

楢崎 久美子*

(2024年11月30日 受理)

Report on the Inheritance of Kimono Culture and Initiatives for SDGs Practiced with University Students

Kumiko NARAZAKI*

Keywords: university students 大学生, Kimono culture 着物文化, SDGs 持続可能な開発目標, practice 実践

1. はじめに

日本における伝統文化の一つである着物文化は洋装が一般化した現代において、日常的なものではなくなっている。文化庁が取りまとめる「令和5年度「生活文化調査研究事業（和装）」報告書」¹⁾によると、昭和50（1975）年には1世帯当たりの和服支出金額は18,378円であったが、令和2（2020）年には1,083円と減少しており、被服時購入金額全体に占める割合も13.96%から1.48%となっている。また、同報告書には令和4年にインターネットを使用して実施した和装に関する意識調査^{注1)}の結果が掲載されており、和装の経験・体験^{注2)}の有無については、経験や体験がある人が49.2%、ない人が50.8%と大きな差はなかったが、男女で比べると、男性は未経験が75.4%、女性は経験や体験がある人が72.8%と逆転しているという特徴があった。また、年齢が高くなるにつれて経験や体験がある回答比率が高くなる傾向が示されていた。

しかし、着物文化は持続可能な社会の構築を考えた時、平面構成で作るときの布地の無駄が出にくいことや、サイズ調整が比較的しやすいこと、素材にもよるが、丈夫で長期間の着用が可能なこと、着られなくなったら布地に返し再利用が可能なことなどから、SDGsにおいて、持続可能な消費と生産のパターンを確保するという12番目の目標のターゲット5「2030年までに、廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。」やターゲット8「2030年までに、人々があらゆる場所において、持続可能な開発及

び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つようにする。」²⁾に寄与するものであると考えられる。

そこで本論では筆者が広島女学院大学で大学生と実践している着物文化の継承とSDGsへの取り組みをまとめ、検討することで、今後さらに効果的に実践していくための課題や今後の展開について述べることにする。

2. 大学生を対象とした着物文化の継承やSDGs達成に向けた取り組みについて

大学生を対象とした着物文化の継承や着物文化を絡めたSDGsの達成に向けた取り組みは本学以外でも見られる。

日本の伝統文化の中核ともいえる京都では、京都女子大学で学生が主体となり、京都に続く伝統的な染色産業の魅力を広く伝えるための商品提案やイベント企画を「伝統をつなぐ会」として実施している。その中のプロジェクトの一つにEnjoy Kimono Projectがあり、カジュアル着物を自ら製作、コーディネートを考え、撮影を行い、記録動画を制作している。この活動は参加した学生にとって、技術と伝統の継承の場となっている³⁾。また、女性の経済的自立、ひいては人間的自立ができるよう女性が収入を得やすい和裁と洋裁に着目して学校を創立したことが始まりである和洋女子大学⁴⁾でも服飾造形学科2年時の選択科目「現代きもの設計」において、着物（和服）の色柄や形の価値に着目し、きものを通してSDGsを考えながらきもの価値をよみがえらせるアップサイクルを中心に授業が行われている⁵⁾。家族が着なくなった着物や古着屋で購入したものなどともなる着

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科教授

物は様々だが、リメイクすることを身近に感じ、それぞれの価値を再確認することができる取り組みである。

このように、大学生を対象とした取り組みはいくつか見られる。これらの活動は単なる着物の知識や技能の習得だけでなく、身近ではない着物に注目することで主体的に衣服に向き合うための複合的な取り組みであると意味づけることができる。本学で実施しているものもこれに類するものであり、それぞれの意味を改めて定義したい。

3. 実践①HJU きものリメイクラボにおける実践

本学で実施している実践の1つ目は、2021年度から一般社団法人広島きもの遊びと連携して行っている「HJU きものリメイクラボ」という地域連携プロジェクトである。ひろしまきもの遊びに寄付された、様々な思いがこもった着物や帯、着物小物を使って、学生が若者向けの商品を企画することを目的に発足した。商品開発、制作をする主な材料は中古の着物であり、SDGs への取り組みとして前面に押し出して進めている。これまでの活動は表1の通りである。

参加学生は地域連携デザインセミナーⅠ・Ⅱ履修者及び課外活動として取り組む学生で、年度によって人数は異なるが、毎年10名前後が所属している。おおよそ週に1度の授業を基本として、活動内容によっては夏季休暇中にも取り組み、また、イベント前には制作の為自主的に

に集まっている。メンバーによっては複数年継続して参加する学生もおり、これまでの活動について新しいメンバーに伝達していったり、前年度よりもよりよく活動するための意見出しを行ったりと積極的な関わりがみられる。学内が活動の主な場であるが、広島きもの遊びからの提案により、学外での販売イベントに参加したり、メンバーの希望により、活動の助けとなる関連企業などを見学したり、ひろしまきもの遊びによる着物文化講座(図1)を開講してもらったりしている。

1年間を区切りとして、商品企画、制作、広報、販売、振り返りをメインに行っており、年度初めに教員が



図1 ひろしまきもの遊び学び舎で着物についてのレクチャーを受けている様子(2023年2月 著者撮影)

表1 HJU きものリメイクラボの活動

年度	学内での活動	学外での活動	活動学生数
2021年度	<ul style="list-style-type: none"> ・メインロゴ制作 ・2021年度商品企画・制作(トートバッグ) 	コロナ禍のため自粛	前期: 11名 後期: 7名
2022年度	<ul style="list-style-type: none"> ・公式インスタグラム開始(10月) ・2022年度商品企画・制作(付けえり, ミニポーチ)・大学祭での販売(11月) ・商品開発のための学内アンケート作成 	エンホテル広島にてひろしまゆかた遊び2022での実売(7月)	前期: 20名 後期: 16名
2023年度	<ul style="list-style-type: none"> ・学内アンケート実施(5月) ・2023年度商品企画・制作(ブックカバー, ばね口ポーチ) ・大学祭での販売(11月) ・学内クリスマスマーケットでの販売(12月) ・オープンキャンパスでの活動報告(3月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・広島きもの遊び学び舎でのミーティング, 着物文化レクチャー(4月) ・愛型女帝アトリエ訪問(6月) ・「ぶち&りり花」見学(8月) 	前期: 10名 後期: 10名
2024年度	<ul style="list-style-type: none"> ・木曜日チャペルでの活動報告(6月) ・オープンキャンパスでの活動報告(8月) ・2024年度商品企画・制作(チョーカー, スマホホルダー) ・大学祭での販売(11月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・マルエス原田見学(9月) ・アルパークにて「日本を楽しむ部」イベントでの販売(12月) 	前期: 8名 後期: 9名

おおよその年間計画を示すものの、年度を重ねるにつれ、メンバーがそれぞれの作業や活動について主体的に考え、希望を出したり動いたりすることでより発展的な活動となっている。

4. 実践②服飾史学・美学演習 I における実践

服飾史学・美学演習 I は3年前期科目で生活デザイン学科学生を対象としたものである。この授業の中で浴衣の着付けを学ぶ回を10年ほど前から組み込んでいた^{注3)}が、2022年度より、ただ着るだけでなく、その技術を踏まえて、他者に見せるという活動を組み込んだ。着付けの授業(90分)は3週連続で行い、まず1週目で帯結びを練習したのち、2週目で浴衣を羽織り、腰紐を締めるところまで、3週目ですべて着付けが完成するよう進めている。補正や浴衣のたたみ方、立ち振る舞いの方法なども含め、段階的に取り組むことで、定着度が高くなる手法を取っている。元々着付けができる学生もたまにいるが、おおよそはこれまで人に着付けられることばかりだった学生であり、自分で着られるとかなり着物に対する印象を変化させ、もっと着こなしてみたい、着て出かけたらいという意欲を見せる。この授業を踏まえたのちに、着物文化継承を目的として、他者へ着物の良さを伝えるためのコーディネート^{注4)}を4~5週使って、グループで検討していく。取り組みの内容については表2の通りである。

これらの活動は単に浴衣の着装方法を学ぶだけでなく、衣服を身に着ける主体として、浴衣をどう扱うか、自らの装いとしてどのように着こなすか、ということを経験的に考える取り組みであり、着物文化の発信という視点として若者から若者へのアピールとして効果的だと考えられる(図2)。

特に、企画段階で前年度の取り組みの様子や学生の着

こなしを見せると、それを踏まえてさらにオリジナリティあふれる提案を行おうとしている様子が見て取れた。例えば、2年次の実習で制作した浴衣や自前のアイテムを活用したり、2024年度は人気ゲームのキャラクターをコンセプトにコーディネートを行い、そのために装飾を手作りしたりする学生も現れ、同じ授業を受けた学生だけでなく、高校生や大学生という身近な存在に見せる機会が増えることで着物への関わりが深まるという実態が見て取れた(図3)。

また以上の取り組みを通して、着用できる衣服が増えることにより、コーディネート^{注4)}のバリエーションが増え、廃棄衣服を減らすきっかけになる可能性も考えられる。実際に、この授業がなければ、2年次に制作した浴衣を着ないままだった、という学生もおり、着物文化の継承と SDGs への取り組みを実践するには着用機会を増やすことが課題解決の方法の1つであることが言える。



図2 2024年7月のオープンキャンパスで実施したファッションショーの様子(広島女学院大学「広島女学院大学HP 大学からのお知らせ7月17日掲載」<https://www.hju.ac.jp/information/detail/N50NE-1046.php> 2024年11月28日最終閲覧)

表2 服飾史学・美学演習 I での着物文化継承の取り組み

年度	取り組み内容	取り組んだ学生数
2022年度	・広島女学院大学自治会主催「 ^{あやめさくはなまつり} 菖蒲華祭」にて浴衣ファッションショー企画・運営(7月)	・服飾史学・美学演習 I 履修者3名とモデル協力学生5名
2023年度	・オープンキャンパスにて浴衣ファッションショー企画・運営(5月) ^{注4)}	・服飾史学・美学演習 I 履修者6名
2024年度	・広島女学院大学自治会主催「 ^{あやめさくはなまつり} 菖蒲華祭」にて浴衣ファッションショー企画・運営(7月) ・オープンキャンパスにて浴衣ファッションショー企画・運営(7月)	・服飾史学・美学演習 I 履修者5名 ・服飾史学・美学演習 I 履修者3名とモデル協力学生4名



図3 2024年度菖蒲華祭でのコーディネートの様子（広島女学院大学「広島女学院大学 HP-大学からのお知らせ2024年7月4日掲載」 <https://www.hju.ac.jp/information/detail/N50NE-1007.php> 20241128最終閲覧）

5. 課題と今後の展開

以上の実践についてそれぞれ意義をまとめた上で、課題と今後の展開について述べる。

実践①については活動のコンセプトそのものはSDGsを根拠としたものだが、学生たちは日常に触れることが少ない着物文化をテキスタイルという素材という視点で触れる体験、また商品開発を通じて自らの生活に隣接したモノづくりの経験により、継続的な興味・関心を引き出す実践と言える。実践②については、学生一人ひとりに着物文化は決して特別ものではない、ということを伝えるために始めた個に働きかける取り組みだったが、継続して実践することで、過年度の取り組みが直接的に学生に作用し、着物文化が非日常つまり晴れ着のイメージから、自ら装うことのできる日常の衣服との融合を促進する効果をもたらす実践と言える。

課題として共通しているのは、継続して着物文化に関わる機会の創出である。実践①では継続メンバーはいるものの、授業履修者がメインの活動を担っているため、すべての活動に連続性があるというわけではない。また、実践②は授業を離れてなおその経験がどのように活用されているか確認できていない、という点である。

そこで、今後の展開として、半年あるいは1年の期間のサイクルで実施している現在の活動を、より長期的な見通しをもって実践することが考えられる。学生の、より着物文化に関わりたい、それを発展させてSDGsに寄

与したいという気持ちを高めるため、これまでの活動の経験者と積極的な交流を図ったり、学外でそういった活動に取り組んでいる方との連携に取り組んだりする必要がある。引き続き、この活動を通して大学生に多様な価値観に触れさせたり、多くの経験を積ませたりすることで、持続可能な社会の構築の一助となるよう実践を進めていく。

注

- 1 調査地域は全国、調査対象者は18歳以上の男女、サンプル数は20,000人、調査時期は令和4年10月14日（金）～10月20日（木）であった。
- 2 経験・体験に関する質問は「着物を自分で着付けている（いた）、あるいは人に着付けている（着付けたことがある）」、「自分で着物を着付けはできないが、人に着付けてもらって着ている（着たことがある）」、「今まで着物を着たことはない」を選択肢としている。
- 3 浴衣は著者が貸し出しているが、自前のものを持参する学生も少なくなく、また、2年生授業の和裁実習でマイサイズの浴衣を制作した学生は自作のものを持参することもある。
- 4 なお、2023年度は「菖蒲華祭^{あやめさくはなまつり}」での取り組みは授業では実施しなかったが、前年度服飾史学・美学演習Ⅰ履修者2名が有志としてモデル協力学生4名とともに浴衣ファッションショー企画・運営している。

引用文献・サイト

- 1) 文化庁参事官（生活文化創造担当）https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/seikatsubunka_chosa/pdf/94133901_01.pdf 令和6年5月31日発行
- 2) イマココラボ「SDGs（持続可能な開発目標）17の目標&169ターゲット個別解説」<https://imacocollabo.or.jp/about-sdgs/17goals/> 20241102最終閲覧
- 3) 京都女子大学伝統をつなぐ会「えんじょいきものぶろじゅくと EKP2023～着物を縫う・着る・楽しむ～」<https://www.youtube.com/watch?v=M9o4zcKEl6c> 20241126最終閲覧
- 4) 和洋女子大学「和洋学園について 理事長挨拶」https://www.wayo.ac.jp/about_wayo 20241126最終閲覧
- 5) 和洋女子大学「服飾造形学科 学科ニュースきものアップサイクルを通してSDGsに取り組む「現代きもの設計」（20230821更新）」https://www.wayo.ac.jp/academics/home_affairs/clothing/news/2023/fukushoku_0821 20241126最終閲覧